

# tokyo 古田会 news

第 8 号

昭和62年 8 月

## 古田武彦と古代史を研究する会

☎03-542-7456

〒104 東京都中央区銀座7-18-13 銀座スカイハイツ710号 ACT内

### 定期講演会の内容

五月三十一日(日)、都立勤労福祉会館において、「日本古代史の中心問題」と題して、定例の古田武彦氏の講演会が開かれ、百二十名の参加で盛会でした。

主なテーマは、次の三つでした。

(一) 卑弥呼(ヒミカ)は誰か。  
—— 卑弥呼比定論の問題 ——



(二) 邪馬一國はどこか。  
—— 倭国中心領域の問題 ——

(三) 「日本国」の創建はいつか。  
—— 「日本国」号と「不常典」の問題 ——

これらのテーマに、筑紫舞と山伏の話、酒匂大尉の墓の話など、最近の研究余話を混え、あっとい間三時間でした。

まず、卑弥呼は誰かという問題で

は、「古代は輝いていた」第一巻で述べられている、卑弥呼を褒依姫に比定する論拠が更に確実になったことが報告されました。

日本書紀の神功皇后比定をはじめとする従来の比定論(倭姫説、天照大神説等)の問題点を整理、再検討してみると、従来説のどれも人物比定の基本的要求を満足していません。一方、褒依姫比定の根拠となる筑後国風土記を写本原文通り解釈することにより、従来の解釈から一歩進んで、

(イ) 褒依姫が九州北・中部の争乱の後に登場すること。

(ロ) 彼女の呪術によって争乱が終結したこと。

(ハ) その後、権力交替が存在した

の三点を補強し、前者の論点と合わせて、卑弥呼=褒依姫の比定がより確実になったと結論されました。

次に、倭国中心領域の問題では、考古学出土物と文献との対比、朝鮮半島史料の内容、短里の問題(風土記、万葉集の中にも短里の存在を指摘)いずれの視点からも、倭国中心領域を近畿地方に比定することは不可能と力説されました。各種の資料を総合して考えるならば、弥生時代の倭国中心領域は九州北部(特に博多湾岸周辺地域)にしか求めることは出来ません。

最後に、「日本国」の創建はいつかという問題に関連して、「不常典」とは一体何をさすのかという、きわめて専門的なテーマを取り上げられました。

従来の皇位継承法説、近江令説の

根拠が、日本書紀、続日本紀の内容からみて、まったく薄弱であることがわかりました。「不常典」とは何かという問いの答えは、紀、続紀の文面を素直に読み取ることにによりおのずと特定されます。それは、書紀天智十年条に記載されている冠位法度(法度とは根本法の意)であり、その内実は、「大化改新」以降の詔制であることが鮮明に結論されました。そして、この「不常典」の問題も含め、三国史記、旧唐書などの記事も考慮すると、「日本国」の創建は、天智十年(ただし、絶対年代は再検討の余地あり)と考えてよいであろうとされました。

倭国を廃して日本国とする旨の記事が紀にないのは、郡評問題の場合と同様、「日本国は神武から始まった」とする紀の建前上、カットされたものと考えられます。

以上、どのテーマをとってみても、安易に原文改訂をしない、史料の内部分批判を慎重に行なう、考古学の成果と文献学の成果を相補うものとして総合的に理解する、という古田史学的方法論が、更に鋭利に研ぎ澄まされているという感じがしました。

### 定期総会報告

講演会終了後、定期総会が開かれました。田島事務局員の司会のもと、山本会長の挨拶に続き、議長(谷本)を選出して、以下の議案を審議、承認しました。

(一) 昭和六十一年度収支報告(鈴木)別表の通り。

(二) 会計監査報告(橋本)  
(三) 昭和六十二年役員選出

- (イ) 講演会 (年二回)
- (ロ) ミニ講演会 (随時)
- (ハ) 機関紙「東京古田会ニュース」(年一回以上発行)
- (ニ) 当会編集による論文集出版
- (ホ) 講演会等の録音テープのダビング
- (ヘ) 朝日トラベルとのタイアップによる古田氏との古代遺跡巡り
- (ト) その他

朝開神社絵馬保存運動への協力。その他。

なお、總會において、繰越余剰金の有効利用について、質問と意見が出されました。提案として、会員と非会員との講演会会費に差が少ないので、講演会費の無料(あるいは五百円)化、講師への謝礼金増額、事務局費用の個人負担分の軽減などがありました。

事務局としては、余剰金の有効利用については、昭和六十二年度の計画の中で、出版事業において相当分の会員還元を行なう予定です。また、朝日トラベルへの事務所使用料支払い、事務局員の交通費の清算などを検討しています

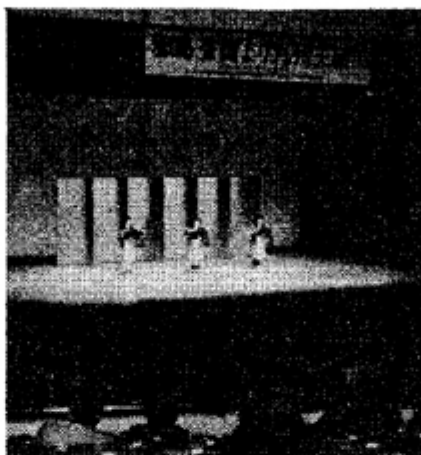
邪馬志国より九州王朝へ

横浜市 田島芳郎

いささか旧聞に属するが、3月21日の両日、福岡市博多区の博多市

民センター大ホールにおいて、九州王朝文化研究会主催、福岡市教育委員会ほか後援による「邪馬志国(臺)国より九州王朝へ」というシンポジウムが開かれた。

初日は4人の講師による講演である。いわゆる定説派の先生方がお逃げになったので、古田派ばかりになってしまったのは残念だったが、それだけに立派なシンポジウムが開催でき、教育委員会の後援を得たという事実には、時代の変遷を感じる。



藤田友治氏は「好太王碑にあらわされた倭とは何か」について講演。

名著「好太王碑論争の解明」(新泉社)で説かれた論旨のポイントを要領よく解説され、王健群氏の論に批判を加えられた。中小路駿逸氏は「万葉集と九州王朝」、橋田薫氏は「邪馬志国論争は終わった」と題して、それぞれ明確に所論を述べられた。

最後に登場した古田先生は「邪馬志国から九州王朝へ」という題で講演された。内容は

①邪馬志国から九州王朝へ「卑弥呼」  
②「褒依姫」説の発展

- ② 狗奴国
- ③ 魏・西晋朝短里による九州王朝の立証
- ④ 弥生期の倭国年表
- ⑤ 出雲朝廷と部民制・神宅制
- ⑥ 祝詞と九州王朝

時間に限りがあるのでじっくりといわねばいけなかったが、はじめの何う話を含めてまさに話題満載の講演であった。最後の祝詞は非常に重要な問題を含んでいるが、これについては現在わが会で編さん準備中の本に、長大な論文を寄せて下さるはずである。

2日目はまず筑紫舞が演ぜられた。全4曲で、西山村光寿齋宗家による初舞の「雲井弄斎」をはじめ、門下の皆さんが舞われる「初瀬川」「三夕」「七段」、いずれもきわめて興味深い舞であった。宗家は3年前から福岡県宗像市に居を移され、まさに筑紫の人々に筑紫舞を教授しておられる。官地獄神社の神官の方々をはじめ、皆熱心に学んでおられるとのこと、亡びる寸前の筑紫舞をただ1人伝承してこられた西山村光寿齋宗家のご努力が、今まさに大輪の花となつて結実されようとしている。まことに喜ばしい限りだ。

続いてデイスカッションに移り、会場からもさかんに質問が出て、賑やかにシンポジウムの幕を閉じた。

ミニ講演会の記録 編集部

8月下旬に実施される中国・河姆渡遺跡を訪ねる旅を控えて、河姆渡に関するミニ講演会が7月4日(土)、一橋の学士会館で開かれた。これは古田先生の強い希望によって急展開催されたもので、会員への通知から

講演会まで間がなかったため多数参加というわけにはいかなかったが、熱心な受講者三十八人が参加。

第一部は福岡県・朝開神社に奉納されている天保4年の絵馬について。これは「よみがえる九州王朝」でも紹介された筑紫舞の描かれた絵馬で、一時失われたと言われていたものである。紛失云々は誤報だったが、全く外部に対してオープンな絵馬堂に掲げられたものだけに、いつなくなつても不思議ではない。そこで古田先生を中心に、有志の拠金で保存しようということになった。

絵馬は検査の上、写真複製し、絵馬堂には複製画を架け、本物は神社側(官司または氏子総代宅)で保存していただくことになり、甘木市教育委員会立ち合いの上、古田先生が京都の「便利堂」へ運ばれた。便利堂は国宝や文化財の処理に定評のある会社だが、ここで絵馬にX線や赤外線をかけたところ、意外な事実が次々に明らかになった。

まず絵の周囲に書かれた文字だが、これが全字判明し、この絵を描いたのが古賀茂助作という絵師であることがわかった(〇〇作は当時の絵師の名に例がある)。また奉納目的は虫害・風害の防除であった。天保4年はいわゆる天保の大飢饉の初年である。

絵の左上に、岩屋のような所で山伏を女性が迎えているように見える部分があるが、これは男女ペアの踊りであった。画面右下の数人は、従来僧侶がソッポを向いているように見えるとされていたが、これは検校で、音曲をうなっているらしいとわ

かった。その他さまざまな新発見があり、古田先生も「この絵に関する見方を一変しました」と語っておられた。

第二部は七時から閉館十分前のアナウンスがあった八時五十分まで、河姆渡遺跡と玦状耳飾について。

玦状耳飾というのはわが国考古学界の用語であって、実態は玦と同じものと考えてよからう。その分布は日本列島に圧倒的に多く、時代もまた古い。特に多いのは中部地方、次いで関東で、北海道から奄美まで広がっている。時代の下がるものは中国の黄河流域に多く、東北や西南、華南から台湾・フィリピン・ペトナムにかけても出る。これまでは年代も違うし、日本列島の玦状耳飾と大陸の玦は分けて考えられてきた。

ところが近年、江南の河姆渡遺跡から古い時代の玦が出土し、その後江南各地で出土が続いたことから、両者を結んで考える学説が有力になった。すなわち玦は江南に起源し、日本列島に、中原に、その他の地方へと伝播したとするのである。しかし古田先生はこの見解をおかしいと断言された。なぜなら江南の玦は時代的に日本列島のものとは異なる。大陸のその他の地方のものとは異なっている。しかも分布の中心は中部地方であって、そこから一方は関東・東北・北海道に、もう一方は近畿・中四国・九州に伸びていて、海を渡れば江南である。それならば日本列島と江南は同一文化圏と考えるべきではないのか。

続いて古田先生は中国・山東省の大汶口遺跡の玉製大珠と埋葬法につ

いて触れられた。これもおそろしい話であった。これもまた日本列島(北陸地方など)に多い方法で、大汶口は中国では異色の遺跡である。古い史書によれば、山東省のあたりは東夷が帰順して住みついた所であり、従来はこの東夷を大陸内部の存在とする学説が有力であったが、古田先生のように明解な論理で探究を進めていけば、当然大汶口遺跡の文化は日本列島と繋がるもの、それも列島側が本家とならざるをえない。

このように非常にエキサイティングな内容のお話が続き、いつしか終了予定時刻の8時を大幅に超過してしまつた。最後に最近古田先生あてに寄せられた中山千夏女史の質問が紹介されたが、全く媚びるところがないにもかかわらず古田史学の特質を捉えた讃辞を寄せられた上、私などでは気のつかないような鋭い質問で、中山女史へのイメーシを一新させられる思いがした。

なお当日の参加者には古田先生サイン入りの論文「部民制の史料批判——出雲風土記を中心として——」が贈られた。

パソコン「三国志」の哀歎

杉並区 吉田堯躬

ファミコンやパソコンゲームに興味が無いわけではなかったが、のめりこむと時間がなくなると敬って敬遠していた。ところが、「三国志」のパソコンゲームが出来たと聞き、心穏やかとはいかなくなつた。その上、出版界のニュースで、ゲームの影響で「三国志」の売上げが増えていると聞くに及んで、遂に我慢出来なくなつて情報を集めた。

友人(パソコンマニア)に、パソコンゲームには四種類(アクション、シミュレーション、パズル及び既成ゲーム)があり、「三国志」はシミュレーションゲームに属するウォーゲームであること、又、ゲームの作者がその世界では著名な人などを教えられた。

意を次し、ヨドバシカメラを訪れたが、一度目は、パソコン(長男所有)の種類の正確なデータがなく、一応引下がり、再度訪れて購入する。パソコンゲーム「三国志」は、「三国志」と称してはいるが、「三国志演義」に基づいている。解説書に両書の関係を説明しているのは良心的ではあるが、卑弥呼の遣使を景初三年としているのは頂けない。

ゲームは①董卓打倒 ②曹操の台頭 ③新時代の幕あけ ④孔明の出陣 ⑤三国の時代の五つのシナリオがあり、それぞれ英雄の数、勝利条件が異なっている。

私が今挑戦しているのは①であるが、中国全土五十八国のうち三十国以上且つ洛陽が長安を支配下にするという勝利条件となっている。

選べる英雄は八人あり、相手はコンピュータでも他の人でも随意である。コンピュータの場合は、その強さ(十段階)、性格(二種類)を決めてスタートする。

本物の三国志の読者としては、曹操が好みであるが、条件的にも有利に出来ている。というのは、部下に優秀な武将が揃っているから。部下の良否、使い方及び、新たな登用の巧拙が結果を左右するのである。英雄、部将の寿命は、基本的には

三国志そのものによって与えられている。しかし、下手な使い方をすると、それ以前に殺されてしまうことがある。

一度、荀彧のいさめも聞かず、部将の登用のため他国へ出たところ、曹操自体が殺されてしまった。その場合、部将の中から後継の英雄を択ぶのであるが、曹丕は登場しておらず、他の部将を登用したところ、それ以外の部将の信頼を失い、裏切られたり、野に下つたりでさんざんな目に会った。

段々とゲームにのめり込み、深夜に至るまでキーボードを叩き、休日も若干の散歩を除き画面とにらめっこ。ゴルフウイドウならぬ古代史ウイドウ兼パソコンゲームウイドウの気持はすこぶる斜めである。

今のところ子供のパソコンを借用しているが、時間の制約があり、追い出されることも屢々。いずれは自分専用をとひそかに狙っているが、先立つものの調達に協力などなさそう。サラ金から借りるといって威かすしかなさそうである。

古田先生と行く古代史の旅

余姚・河姆渡遺跡

◎ 中国文明の秘密を解く鍵

期日 8月23日(日)〜30日(日)

旅行代金 二九六、〇〇〇円

行程①成田→上海②紹興・禹陵等見学③玦状耳飾が出土した河姆渡遺跡④杭州・博物館、岳王廟、西湖⑤南京・博物館、靈山寺等⑥東晋の遺跡、明孝陵等⑦上海・博物館、玉佛寺等⑧上海→成田

お申し込みは朝日トラベルへ。

(03-1542-1745)

**朝聞神社絵馬の保存について**  
 朝聞神社（福岡県朝倉郡朝倉町）の絵馬は、筑紫舞の舞人たちの舞い振りを如実に活写した、貴重な文化遺産とされています。（よみがえる九州王朝）角川選書。昨年、この貴重な絵が失われたとの報があり関係者に深い衝撃を与えましたが、幸いにも誤報であることが判明しました。この件を、逆縁として、今回その保存のため、積極的な行動をおこすことを決意しました。

△その一▽当の絵に対し、文化財処理の専門家の手によって検査（画面の泥を拭うこと等を含む）・撮影等の厳正な科学的作業を行っていた。△その二▽その後、当の写真（カラー）を現地の絵馬堂に掲げ、実物は当神社関係者（宮司・氏子總代）方に保管していただく。△その三▽右に要する費用は、すべて当方（古田）並びに絵馬保存会（仮称）の手によって行い、当神社関係者には負担を求めない。

以上の方針を樹立し、当神社宮司上原氏（恵蘇八幡宮宮司兼務）にお願いいたしましたところ（今年三月）御快諾いただいた上、氏子總代の方にも御了承をえたこと御連絡いただきました（同五月）。

早速、京都に赴き、国宝・文化財処理に定評をもつ便利堂にお願いたしましたところ、幸いにも懇切な御協力をうることとなりました。

最初、私は公的な保存等に期待していましたが、種々の法的制約もあり、やはり民衆側の自主的活動こそ先決、そのように考えて今回の決意と行動となった次第です。

右のような徴志をお汲み取りいただき、御協力を賜わりうる方々がおられるならば、この上なき至幸と、心の底から願っております。  
 一九八七年五月三十一日  
 皆様  
 古田武彦

ご協力下さる方は、同封の郵便振替用紙で一口二千円をお送り下さい。  
 事務局

**絆 (アマ族の対島漂着説) のルーツの謎を追う**

— 原始船で東支那海渡海を提唱 —  
 鎌倉市 関谷 博

一九七五年角川春樹氏の発案で復元古代船「野性号」が母船付添いで玄海灘を渡海したのは御承知の事である。その結果は予想以上に黒潮の北上が強烈であり抵抗が強かった事は之又御承知の通りである。速水保孝氏の「古代出雲と新羅」の著書の中で「国引き神話」の国引きは新羅人の出雲への移住と説明がある。野性号の実験は古代出雲人のルーツの証明と考えれば良いと思う。帯沙、釜山、ウルチンの凡ては出雲に通じるのである。黒潮を素直にうければそうなるのである。国生み神話のアマ族の対島への渡来ルーツは「渡来そのものは」更に古く対島に漂着しているのである。其の後の筑紫上陸とは時代を区分して考えなければならぬ。確かに対島で「大休止」をして、鉄文化を半島や対島の原住の倭人から教えられ、沖の島で日輪の祭祠を行い、地元で海洋民であるから漁業を行い、宍岐で農産物を貯蔵、筑紫への渡海の機会を伺った。

アマ族はもとも江南の米作民であるから、干米は手の物である。茲に私は疑念がある。今日手許の史料資料等、韓半島の影響下にあるが、二千年後の今日に至る迄吾々の日常の衣食住は連綿として南方江南風である。衣は倭人の衣や南方民に同じ腰巻風、住は庶民の住居は開放的、然も神社の屋根造も南方的、食も米作（朝鮮は、基本的に小麦、家は土石壁、食は北方系凡て大陸系）この半島との相違をどの様に説明出来るかである。古事紀は国生みをしたがその経路を黙して語らない。

話は変わるが、昨年ポリネシア航海民が数千キロを小笠原迄原始船で航海した事を読者は新聞でご承知の筈である。アマ族は海洋民である。この絶対沈まない「カヌー航海船」は、お手の物である。私の東支那海漂流の経験も含めて、黒潮の時速十四キロの潮流は、玄海灘の横断の苦難とは異り素直に航行可能である。

若し危険があるとすれば揚子江の河口の流れを利用して乗り切り、黒潮に乗る時に「持衰」のお祈り、船長の経験が必要なのである。竹筒の一ヶ月分の清水と干米と野菜若干を用意するだけで九百キロは航海出来る。七五三年秋の国使藤原清河の遣唐船団の掃り船は揚州から沖繩那覇を経由だが、航海日正味十九日である。この頃船は大型で原始時代よりむしろ危険が多い建造船でもの事である。北九州各地の地下に今に眠る壁面の船は海洋民族の江南の先祖のルーツを偲ぶかけ橋だったのである。（星月よもやま話）（註、星月は万葉集に出て来る鎌倉の枕言葉）

**古田先生の論文紹介 ◎部民制の史料批判**

— 出雲風土記を中心として —  
 杉並区 黒田純子

古田先生が、右の論文を昭和薬科大学紀要第21号に寄稿されています。この論文は、「部」は大和朝廷の政治組織であるという従来の説に対し、根本的な批判を行ったものです。すなわち、部民制の根本資料について詳細な検討を行い、その上に立って「部」が大和朝廷以外のものにも存在するということを論証しています。

前半では「朝廷」といえばその政治であり、「部」といえばその政治制度という安易な立場を戦後古代史学が受けついでいる経緯についてを詳細に史料で論述され、この理解法によると生ずる出雲風土記に見出される矛盾、さらに矛盾回避のために改削された点について鋭い指摘が行われています。

そうして後半では、この実証的な史料批判から、出雲風土記の「部」が「部」であり、「部」は「部」が大穴持命の国ゆすり以前に出雲中心に存在していた政治制度であることを示され、さらに出雲における「部」は「部」は出雲朝廷に、九州における「部」は筑紫朝廷のものに存在したことを実証されています。

「神戸忌部」や「三津郷」、国造と天造など、これまで講演会や懇談会でお話をうかがっていたときは、先生の温容とお話しぶりに、古代の出雲を旅しているような気分でしたが、あらためて学問の厳しさに感銘を深くいたしました。紀要は事務局にあります。